

論文審査結果の要旨

食を題材とする国際交流を取り入れた外国語活動の実践と検証

氏名 神田 聖子

本論文は食を題材とする国際交流を取り入れた外国語活動」を 2011 年から 2013 年の 3 年間実施し、食と英語の学習効果、異文化の理解および国際交流の改善と定着について検討することを目的とした研究である。研究の背景には、小学校学習指導要領（2008 年告示）において「学校における食育の推進」が位置づけられ、同時に英語を原則とする外国語活動が新設されたことがある。外国語活動は 2011 年 4 月より小学校第 5・6 学年で実施されており、目標はコミュニケーション能力の素地を養うことである。内容には「異なる文化をもつ人々との交流を体験し、文化等に対する理解を深めること」も含まれている。文部科学省の外国語活動の教材には、文化の重要な側面であり、日常の体験とも結びつく食べ物が題材として取りあげられている。一方食育の手引きには、複数の教科・教育活動による学習内容が例示されているが、外国語活動の学習内容は記載されておらず、食育と外国語活動を連携させた研究報告も少ない。

【第 1 章】食を題材とする国際交流の学習効果

【方法】対象者は 2011 年に G 県 G 小学校第 6 学年に在籍する 120 名であり、調査は事前・交流前・交流後調査の 3 回行なった。1 クラスを「交流群」、2 クラスを「非交流群」に割り付け、両群とも事前・交流前調査間に、神田らが開発した英語版食育ソフトを活用した 3 回の Shokuiku を実施した。その後、交流群のみ 1 回の国際交流に参加した。調査内容

は食と英語・コミュニケーションに関する興味・重要性・学習意欲、態度、自己効力、行動、及び食と英語の両要素を含む知識である。上記調査項目の回答結果の変化を Wilcoxon の符号付順位和検定（有意水準 5% 未満）を用いて 3 回の調査間および交流・非交流群間で比較検討した。3 年度とも交流には通信システム Skype™ を用い、交流校として大韓民国ソウル市立の小学校の協力を得た。

【結果と考察】 事前－交流前調査間に両群で同じ Shokuiku を受けているにもかかわらず結果は異なっていた。交流群は事前調査に比べて交流前に食の学習への興味と学習意欲が有意に高まり、同時に栄養バランスの態度、行動も有意に良好な変化を示した。しかし、非交流群は事前－交流前調査間の変化はなかった。英語・コミュニケーションへの学習については国際交流前後で有効性を明らかにできなかった。以上より、国際交流をするという教師から児童への事前の伝達が学習への動機づけとなり、交流群において食の学習効果を生じたと推察された。

【第 2 章】異文化受容に着目した学習効果

【方法】 第 1 章と同じ G 小学校で 2012 年に第 6 学年に在籍する 120 名を対象とし、同様に交流群と非交流群に分けた。調査は事前、交流 3 週間後の事後、および交流 2.5 ヶ月後の追跡調査の 3 回とした。両群とも事前－事後調査の間に両国に共通している「主食、菓子、学校給食」を教材とした 3 回の Shokuiku を受け、その後、交流群のみ 1 回の国際交流に参加した。菓子を教材とした Shokuiku では、韓国菓子の試食を含め、味覚用語について学んだ。3 回の調査内容は①食への関心・重要性、②韓国の食文化に関する異文化受容、③外国語に関する異文化受容であり、3 回の調査間における上記①、②、③の変化を比較検討した。

【結果と考察】 交流群では 3 回の事前 shokuiku で教材とした食物につ

いては、事前・事後の評価においても食べる意欲が高まっていた。追跡調査では、韓国菓子への食べる意欲は、国際交流の実施有無にかかわらず両群で有意に定着していた。また、味覚用語を英語で話す自信にもつながることを確認した。国外の食を題材とする外国語活動は、交流群のみでなく非交流群も学習内容を理解し、異文化を受容していたが、交流群の方が中間での定着がみられた。以上より国外の食を題材とし、試食を伴う外国語活動は、必ずしも国際交流を実施しなくとも異文化の受容を促すことが示された。

【第3章】国際交流の再参加意向に関する影響要因の検討

【方法】2013年に1、2章と同じG小学校の第6学年に在籍し国際交流に参加した児童40名を対象とした。調査は事前・事後調査とし、児童はこの間に3回のShokuikuと1回の国際交流に参加した。事前調査では属性について、事後調査では食と英語の学習の再参加への影響要因について調査した。事後調査時の再参加意向の「高群」及び「低群」を外的基準とし、説明変数を①対象者特性、②食に関する再参加への影響要因、③英語に関する再参加への影響要因、④英語コミュニケーションの4側面につき林氏の数量化Ⅱ類により解析した。

【結果と考察】国際交流の再参加の意向が高い児童は、①本プログラム以前に国際交流の参加経験があり、②英語を進んで話すことができる児童であった。特に英語を話せる自信の影響が強かった。以上より、第5学年、第6学年での継続的な国際交流の実施により「英語を話せる自信」に重点を置いたShokuikuプログラムの立案が必要であると考えられる。

以上のように、食を題材とする外国語活動は、食への学習に有効であることが示された。これは、時間割に存在せず複数の教科や教育活動で実

施されている食育を、外国語活動にても実施する新たな食育の展開例を示すものであり、博士（栄養学）の学位の授与に値するものと認められる。

【論文審査委員】

(委員長) 教授 武藤 志真子

教授 武見 ゆかり

教授 石田 裕美

教授 小林 正子

教授 橋本 紀子